

元内和弘

銃声が鳴り響く場所だった。暗い活気と明るい悲鳴が時に飛び交う、故郷はそんな下らない場所である。

「こつちが何したって言うんだよ！」

「頭出すんじゃねえー！」

「手余ってる奴は全員武装してこい！」

俺は南米のアボカド畑を持つ農場で生まれた。この州を縄張りとするカルテルの連中が突然やってきては畑ごとアボカドを流通するシステム全般を引き渡せと迫ってきたのである。

「エリック、テメエーの銃だ。じゃんじゃん撃て！」

「分かってるよ！」

父から渡された銃は相変わらず少し錆びれているも冷たくて重たい。対比的にも引き金は軽く、引けば鉛の弾丸が命を摘み取る。個人的な見解だが、アボカドを取るより楽だ。

カルテルと農場とで数十人が互いを撃ち合った。銃弾が耳の横を掠り、音速を超える金属が空気を破る嫌な音が鼓膜を撫でやがる。

「うちの農場を！ 警察野郎共は何をしているんだ！」

「黙ってるエリック。撃たれるぞ！」

アボカドを運ぶ為のトラックを背に、私は必死に小銃の弾倉を空にした。銃声が止んだのは連中とこつちを合わせて八は死んだ後である。

「あんまり経験したくないな、これは」

転がっている死体達を誰が撃ったのかは、正直見分けが付かない。自分ではないで欲しいという気持ちと自分ではないという確信がぶつかるのはいつもの事だった。

倒れた90kg超えるカルテル連中の死体を運ぶ。軍隊のように武装した彼等からその全てを取り上げ、死体

はそこら辺に捨てた。できれば危険地域だと撤収した警察の事務所にぶち込んでやりたいが、流行り病を起こす訳にはいかない。

「エリック手伝え！」「運ぶぞ」「クソ共が！」

混乱の中で鉛の弾丸を浴びたのは敵だけではなかった。遠くから幼馴染を抱えた母の嘆く声が轟く。しかしながら、俺は自分への失望感だけが湧いていた。

「ああは、なりたくないな」

死んだ友達を見て、そのような有るまじき考えしかなかった。

「ああは、なりたくない」

このような最低の考えしか浮かべられない。

流れて道路沿いにできた血だまりが、アボカド農場のある方へと染み込んでいった。

「アボカドは、たわなに実るだろうな」

血を啜って実る果物は、果たして健康に良いのだろうか。

「アメリカの皆さんは、これを食べれば健康になると思っているのかよ」

死体を片付け、私は銃を手に工場を警備していた。大人数人は二十四時間の交代制で村を巡回し、カルテル連中が来ないか見張っている。

あれもこれもアメリカみたいな国でアボカドが有名になり、輸入量が増えつつあるからだ。値上げが始まった途端こんな調子である。今回が始めての事だが、カルテル連中の襲撃なんて珍しくもない。

「健康に良いぞうだ」

「誰だテメエーは」

街の奴じゃない女性の声だった。即座に小銃を構えるも慌てる素振りもなく鼻歌混じりに財布を取り出す。彼

女はそこから取り出したカード型のナイフでアボカドを切り、大きな種を取り除いては果肉を口に放り込んだ。

「何でも、健康にも美容にも良いらしい。おかげさまで私もここに来てからは肌の調子が宜しい」

深々と被ったフードの下からはプロンドの髪が見え、つい先程銃弾が飛び散ったのにも埃一つついていないスーツを身に付けている。ピンと伸びた背筋から皺を作らない端正な仕草は妙にいけ好かなきが染みていた。

「観光客さんか？ 農場見学は今日入ってないはずだが？」

「見学をやるならもつと安全な場所を選ぶさ。私は買いに来たんじゃないよ」

フードを脱いだ顔は艶のある健康な肌色を持ち、瞳はこっちの銃を映す透き通った灰色をして、唇は今にも流れ出すような赤色。冗談でも銃口を向けられれば何かしらの反応ができるのだが、瞳を動かす事すらしない態度には正直気持ち悪さが先走ってしまう。

「武器を、売りに来ただけですとも。モーリシエウから販売代理人として参ったアリスです。ご注文のミニ DUN 00 発、只今お持ちしました」

「武器商人？」

「『少しばかり非正規的な』が前に付きますが。さて、注文の決済を下さる方に案内して貰えますでしょうかね？」

その数日後、村はカルテルの報復に合った。ニュースにてその事を知ったのは武器商人をまともな道路の繋がつている都会まで案内してからの事である。

——リビアでの一件——

見渡す限り砂埃の舞う砂漠が続き、見捨てられてもいないが荒んではいる光景が広がっていた。地平線を隠しているのは岩石と丘と石山、そして人の住んでいる崩れた廃墟くらいである。

そんな場所を俺達は誰が最初に作ったかも知れない平らに磨かれた道路の上を走っていた。数台の軽トラックの走る音だけが風に乗って広がるのみである。

(なんて酷い道路なんだ)

もう出て来てから数年で曖昧だが、故郷メキシコの街もこれよりはマシだった気がした。

「それに熱過ぎるだろここ」

「熱いなーエリック」

砂に覆われない為に窓も閉じているせいで風も満足に浴びれない。肌が擦らないようにと布くらい巻いているが、現地の人間が心配になるくらいだ。

「でも、あなたの故郷もこれくらいじゃなかったっけ？」

寧ろそっちの方が蒸し暑かった風を感じるけど？」

「確かにそうだった気もする。うる覚えだけど」

「うん。だったら、こう考えて見よう。ここにエアコンを売ればどうかかな？」

荷物を沢山積んで数十キロを走っていると退屈との戦いは免れない。そんな時アリスはいつも他愛なくも時間潰しにも悪い話題を振ってくる。

「エアコンを回せる電気があったら売れたんじゃない？」

現物支払いする連中がでそうだけど」

「それもそうだ。ならエアコンを一度バッテリーで使わせて、それからケーブル設置まで売り込むというのは？」

「こんな所で？ ケーブルごと電気まで奪われるに決ま

っている」

「他所が手を付けられない理由か」

「そもそも俺達がエアコンを転売しても金にならない」

「こっちの荷物は原価の十倍以上の値段で売れるからな」

軍需品はこれだから良いのだ。こっちのようなフリーランスだけの話かもしれないが、数十年前に作られた補給品がマニアに高値で取引され、武器は売り手と買い手が有り余る。

「この仕事も途中で襲撃されたりで、十分過ぎるくらい危ないけども」

「結局何事も無かったから良いんだよ。生きてるじゃん俺達」

「盗賊が軍隊に消されたのにな？」

「特殊部隊みたいに武装しているトラックを襲った連中の方が頭可笑しいだろ」

俺達はただの武器商人、普通に盗賊の群れに襲われれば死は確実だった。けれど幸い今回のクライアントは太腹で、街から砂漠越しに護衛をしてくれたのである。

(実際の所、反対側に売れないようにとの監視してるんだらうけどな)

正直兵隊連中の態度もビジネスパートナーへの配慮というよりかは、警戒と監視のそれだった。それもそのはず、なんせリビアは現在三つの勢力が対立しているのだから。

「盗賊さん達も必死だったんじゃない？ こんな砂漠に来た久しぶりの得物だっただろうに」

「それで皆殺しにされちゃ世話ねえだろうよ。てかさろそらだ」

ひたすら続く道の末に建物の天辺が表れた。層気楼でなければ目的地に違いない。GNA、リビアの統一政府の

軍が滞在している革命旅団の基地である。

「お仕事との時間だ用心棒さんよ」

「やめてくれ。商品を浪費したくも、振り回されたくもない」

今回の取引場所、常連のリビアは息の詰まる闇鍋状態だった。西方と東方との対立を中心にしたと言えば簡単だろう。が、同じ国に二つの議会と二人の総理ができ、加えて民兵隊やISIL、テロ組織、反政府勢力、そして評議会まで。平和的との声もあるが武装していない派閥は一カ所ない。老弱男女を問わずに国民総人口の1割は銃を持っているだろう。

さてここからが大切だ。足りない頭を絞り出して悩むべき問題がある。それは、そう、残り8割にどうやって武器を売り込めるかだ。

俺達は商品を見せびらかした。と言っても、買うのが確定されている発注である分にはまじろっこしい営業はしなくて済む。

「PK 機関銃 30丁、FN F2000 突撃小銃計160丁、拳銃 Glock 90丁と M67 手榴弾 520。銃弾も注文通りに只今お持ちしました。何十年前に仕入れたソ連製のAKじゃもう古いでしょう。ベルギーの突撃小銃は使い勝手抜群ですよ？」

(Glock 拳銃は中国産のパチモンだけだな)

中東人である軍の担当者や署名の入った書類と大きなケースを運ばせた。銃と手榴弾の入っている木箱と札束の入れたケースが交換され、俺が中身を確かめる。確かに定額通りの支払いだ。正規兵より気前が良いというのは、国の状況を見事に表している。

「チンピラ共と違って変な粉とかが込められていないの

は助かる」

札束に思わず呟いてしまった。普段から小声で放す習慣を身に付けていて大正解である。

「相変わらずの速やかな配達、ご苦労様でした。船で来るとの連絡でしたので驚きましたよ」

「途中で連絡できなくて申し訳ございません。少々計画に変更がありました」

「いえいえ、こういう事もあるかと思っておりました」

部隊を纏めている隊長は、何処にでもみれるふくよかな印象の中年男性だった。身に付けている服を脱いでシヤツでも着込めば、たちまち村長でもなれそうな物である。

「そちらの方は？」

「ああ、こつちはボディガードです。何分一人商売は危ない物ですから」

「確かに、お察しします」

私は顔にマスクと相手もない通信機を付けたまま私兵を演じた。一武器商人が私兵を持っている訳もないが、女性一人だとなめられない為の張つたりだとも思ってくるだろう。

流石アメリカという名が通じるのか、それとも自分達に「支援」してくれているという印象が強いのか、兵士達の目は疑惑の視線に満ちていた。雰囲気も、下手な事して即発砲という事態にはならないくらい和らいでいる。

「武器商人という身としては何ですが、一早く真の解放が成される事を祈っています」

「ありがとうございます。勿論我々はこの戦いをに勝利しますとも」

この近辺に来てお祈り申し上げるのも数回はしてきた。始まって数年だというのに、この市場は枯れそうにない。

おかげで同業者を抑えるのにやつきにさせられる。

「それじゃエリック……」

「ああ、少々待つてくださいませんか」

商談を終えて帰ろうと席から立ち上がると、銃を持った数人が俺達の回りを立ち塞いだ。まともに撃った事もない、カスタマイズしたアサルトライフルを握るも、正直訓練された軍相手だと一秒で殺される自信がある。

(売り物で殺されるとか。笑い話にもならないんだがな)

「何でしょうか。追加の発注なら謹んでお受けしますが」

「それは是非お願いしたい案件ですが、その前に確かめたい事があるのですよ。我が軍に取って重要な案件でしてね？」

奴は声を低くして、無表情に怒りの色を塗りたくるような視線でこちらに色気を出してきた。温厚だった印象が一気に冷め切る。右側からは聴き慣れた、銃の安全装置を外す音がいつもの数十倍重く轟いてきた。

「実は我等が敵である国民軍に絡んだ話です。そちらにもアメリカさんの商人の方々が出入りしているそうで」

もしこれが撃たれない自信のない状況なら断言できる。俺は成人用のおむつを履いてきた。

「念のため、お二方はこちらで他の商売の日程はありますか？」

銃口から放たれたような直接的な質問、軍の駐屯していた基地の外郭に自然と目が行く。壊れた街の外壁には干乾びた死体と、死体の量とはまるで嘔みあわない乾いた血の跡が垣間見えた。虐殺、処刑、街で邪魔な要素がある程度減らした跡らしい。

倒れた死骸の一つは120もいかな背丈の持ち主で、間違いない非戦闘員の物であろう。

間違いない非戦闘員の物であろう。

（ああは、なりたくない物だ）

「負けている側は危険でならん。だからこそ商売が捗るけど」

「静かにしろよエリック」

覆面の下から冷や汗が流れた。何度も経験した出来事かどうかは別にして、銃口向けられるのは基本慣れない。

「どうですか？」

兵士達の視線には「どうせ」という視線が込められていた。しかしアリサは流石のプロと言った所、微笑を崩さずに鉄板でも張り付けたような表情のまま小首をかしげる。

「まさかまさか。そのような外道を犯している訳ないではないですか。きっと正義を知らぬ金の亡者の所業でしょう」

何とも自己紹介じみていた。しかし嘘をついていない点に彼女が持つ最低限の良心を感じて欲しい。

「いやなに、アメリカさんもイギリスさんも、そちらに支援を行っているという噂がありましてね。それに関して知っていらっしゃる点は？」

「ご覧の通り、私は一武器商に過ぎません。有意味な情報なら是非売りたいくらいですが、とても売れそうな在庫がありませんね。商品が入荷し次第、そちらに連絡する事くらいは約束できます」

二人が視線を交わしながら一分が過ぎた。どちらも何も起き得ないと考えているようで、けれど無視はできないのだろう。両方にとって、それぞれのメンツという物があるのだ。

「成程、いや、妙な質問をしてすみません」

「いえいえ、戦争も長引いているのです。心境、僅かながらお察しします」

目を瞑って自分の黒い髭を摩りながら、相手は鼻息を吹いて優しそうな笑みを作る。そして銃を握っている兵士に命令を下す。二人の兵士は「はい」とだけ返答し、以前我々が売りさばいた装甲車に乗り込んだ。

「君達、お二方を安全に『国外』まで見送りするように」

「そのような事をさせては申し訳なく……」

「いえいえ。決して粗相があつてはならないと心得たまえ！ 例えば『途中で脇に外れる』等の事は決してないように頼むぞ？」

「こちらの遠慮はお構いなしに連中は『警護』の準備を済ませる。」

「周辺は危険な地域です。もし敵の軍と遭遇でもしたら危険でしょう？ うっかり物資を奪われてしまう、等の事があつてはいけません。接触を試みる輩全てを、こちらで処理させていただきます」

「いやいや」

「それに我々の味方だと住民に教えて置かないと、逆恨みを抱いている連中もいるのですから万全の体制でいかなくはなりませんとも」

「そもそも拒否権を握らせる気はないらしい。」

「何が何でも国民軍には近づかせない気だぞ」

「だろうねー。チラツと見えたけど、あの指揮官は何処かいつちまつてるよ。署名の字からみれば、手の震えが酷い。アルコールとかなのかね」

連中に聞こえないように小声で話すとアリサから苦虫を噛み潰したような表情が見えた。

「専門的なカウンセリングが必要に見える」

「是非ともアメリカの刑務所で受けて欲しい物だ」

既に次の取引が明日に決まっているのだ。相手も忙しい手前、待たせる無礼を許容できないだろう。流石に武

器の供給源に被害を及ぼす事はないと思うが、戦争で負けている連中は何をしだしても可笑しくない。

（この事で値引きでもされたらどう責任取るつもりなんだ！）

軽トラが発発すると、手前と真後ろに連中が追つてきた。

「仕方ない。船に連絡して出発させる。あんたは今港にある他の貨物船の検索。フランスとかオランダとか、いやこの際ヨーロッパ諸国の方なら何処でも良いから船の大きさに適当な奴を探して」

「了解。港着くまでには問題ないだろ。それより計画はあるんだろうな」

「迅速、正確、低価格がモットー。注文された件数は絶対に完璧な形で届ける。今まで通り！」

彼女の横顔はいつの間にか自信に満ちた、いつもの微笑みに戻っていた。ただそんな横顔を見ただけで、何とかなるだろうという安心感が湧いてくる。

「貨物は何処に降ろすんだ？ 適当な倉庫にでもぶち込んでおくか？」

「そんな必要はない。そのまま出発させよう」

「そのまま？ 商品乗せたまま港を離れさせるのか？」

「国に帰る為の船便はどうにかなんととして、商品まで港を離れると取引の場に運べない。」

グチグチ零しているとアリサの掌が肩を叩いてきた。運転しながら前も見ずに、彼女はタバコを突き付ける。火を付けるってサインだ。

「全部計画がある。エリックはいつも心配し過ぎだ」

「お前はいつも無心に過ぎると思っけどな」

「武器商たる者、面倒な事の一切は考えず生きるべきだ。三つの原則を教えたはずだよ？」

「商品を買うのは誰を考えない。商品が何処に使われるかを考えない。そして最後に」

スマホに入っていた音楽を思いつきり大音量にして我々は歌に声を乗せる。砂漠でカントリー風のメロディを口ずさんでいると、スパゲッティ・ウエスタン映画の主役にもなった気分だ。

「武器を作つてくださる常任理事国の皆様への感謝を忘れないように。国際連合に祝福あれ FUCKING UN!」

「さあ仕事だエリック。常連さんを待たせちゃいかん。土に帰つちまう前に商品を届けないと運賃にもならねえ」

「了解」

兵士が乗っている車を頭と尻に置いたまま港に着いた。深い青の波がコンクリートにぶつかる度にカモメの鳴き声混じりの涼しい水しぶきが体中になだれ込む。遠くではフランスの国旗を掲げた貨物船が入港してきていた。アリサは無口な兵士達に向かって感謝を伝える。が、

勿論冷たくあしらわれるだけだった。

「ありがとございしました。我々の見送りはここで大丈夫ですのぞ」

「さっさと船に乗れ」

俺達が船に乗っても尚、兵士達は車に背中を預けたままこちらを監視する。船が離れるまで場を守る気ではないらしい。

しかし直ぐに向こうからこの状況から抜けさせてくれる「俺達の船」が近づいてきた。共に誰の所有か分からない船の船員が話しかけてくる。

「おい、お前等誰だ。何故この船に乗っている?」

「まあまあ今降りますとも。少々お借りしているだけで

す」

「旅客戦じゃあるまいし、無断で乗られると困るんだよ」

フランスの国旗を掲げた貨物船が、知らない船の隣に近づけてきた。甲板の高さが違っていて移動の為には飛び降りなければいけない。高所恐怖症である俺に取っての試練だろうか。

「次からはマットレスを常備しておかないか? 俺転んで怪我するの怖いんだけど」

「戦闘地帯から紛争地域まで軽トラ走らせておいた癖に、今更なにを」

「銃弾は幾ら注意しても撃たれる時は撃たれる。けど飛び降りるのはマットレス一つあれば怪我しないで済むだろう? 二つは全然違う事柄だ」

俺は船員の胸ポケットに20ドル入りのタバコケースを押し込み、先にアリサを送った。男は一瞬戸惑うも、甲板に他に誰もいない事を確かめてからその場を離れる。「まあ、この事は騒がずにお願います。同じ地球出身の同僚ではありませんか。助け合いで罰は当たりません」

「た、確かにその通りですね」

「さっさと降りてこーい」

「はいはい。分かりましたよ」

下から聞こえる声に、直ぐに後を追った。目を開けると怖く、閉じると危ないので片目だけを瞑ったまま宙に身を投げる。

鉄製の甲板に運動靴を履いた成人男性の重さがぶつかり、響くような音が下から鳴った。海の潮騒がなければ、若しくは向こう側にいる兵士達にも聞こえたかも知れない。

「さっさと中に入ってこいよエリック。こんな手間かけて「見られましたー」なんて聞抜け過ぎる」

大きな貨物船が連中の視界を隠してくれている内に身を隠した。やがて船は元々停泊していた場所に戻り、船長さんは何食わぬ顔で港に船をとめる。

俺は船内に保管してあった背広を着て腕時計を手首に、磨かれた靴を履いた。逆にアリサは顔を頭巾で隠して銃を握る。一種のカモフラージュだが、さて実際どこまで隠せているかは不明だ。

しかし統一政府側にバレない為の小細工としては良い。同じ地域内で武器を売る時はこうやって陣営ごとに役割を変えていくのがセオリーだ。

「蝙蝠だと思われれば良くないからな。印象的にも、時的にもな」

「確かに、時期が良くないね。蝙蝠だと特に」

基本的に武器商人を殺すような連中はそういない。他の武器商人も来なくなったら武器調達に困るからだ。しかし相手側に武器流す連中を消そうとする若衆は一定数いる。

「感情に任せた人は怖くてならん」

「エリックだつて同じだろ」

「俺が?」

「相手が現金支払いしないとさ」

それは事実じゃない。貴金属は受け付けているし、寧ろ登録されていない輝く石は大歓迎だ。

役割を変えて俺達は優勢の右側へ赴き、同じ国等から仕入れた注文通りの品を売りさばく。そんな美味しい戦争はそれから3年以上にも続き、2020年の終わり頃には残念ながら終戦をちらつかせた。

アメリカ、ブラジル、チェコスロヴァキア、イギリス、フランス、イタリア、北朝鮮の武器まで、ある物は全部

売ってきた物である。装甲車までは売ってみた物の、戦闘機のオプション装備を仕入れられなかったのは痛い。が、もう潮時という事だ。

——潮時——

時は時でも最後に稼がねば、という思いから俺達は地中海を回りながら商売を続けた。

基本的に政府から武器輸出が認められた団体から依頼がサイトに載せられれば、個人事業主である俺達のようなフリーランスが仕事を受ける仕組みができています。それからは武器を調達して戦争地域に行つて、領収書を貰うのが基本だ。

仕事終わりはいつも酒を飲んで戦場で見た光景を記憶の彼方に押しやり、また次の仕事に取り掛かる。そんなある日の事だった。

「できちゃったよ。確実に」

アフガニスタンの米軍基地回り、アフガニスタンから撤収する彼等から置いて行く武器を貰おうとしていた。

近くの宿で酒を十瓶くらいは飲み干した次の朝、テーブルの前で頭を抱えたアリサがそんな事を言い出す。

「何がだ？」

「ちよつとだけだけど、不安だったんだ。時差とか移動でさ。本来なら昨日は絶対大丈夫のはずなんだ」

「だから要点を言え。何がどうなったんだ」

頭を抱えている肩に触れると肘を置いていた腕が力なく落ちた。手を退かしたテーブルの上には妊娠のテスト機画面に線を引かせている。

「できたのか？」

「みたい」

四六時中一緒にいるのだ。一緒に行動して8年は軽く

経つ。こんな事が起きるかもと思っていたが、心の準備は全くしていなかった。酒飲んで仕事して酒飲めば、それだけで全て変わらぬと思ひ込んでいたのだと今更気付いてしまう。

「いや、別にブルーになる事でもないが、仕事には障るか」

「まあそうだろうね」

産婦人科のお医者さんでもない。関連知識は何もないが、直感的に俺はそんな事を口にした。船での長距離移動、時差、銃声の鳴る紛争地域、たまに起こる胃の痛くなる脅し、様々なトラブル、買収の利かない国際警察、妊娠関係なく居心地良い環境とはいかない。

さつさと商売を始めなければ買い取る前に基地ごとテロリストどもに奪われる。文化遺産を爆破させるような連中だ。見境があるとは思えない。

「や、やめちゃおうかな？ 今回の注文とか、仕入れとか」

「ぼそつとアリサがそんな事を呟いた。

「やめるって、米軍が撤収するなんて十年以上経つての決定だぞ？ もうこんな機会は二度と来ない」

「い、言ってみただけだつて！ ただの冗談さ冗談！」

涼し気な表情を浮かべながら、彼女は声を大にして笑つて見せた。その笑みは余りにも作作的で、嘘くそく、なにより納得がいかない。

少なくとも俺が知る彼女は、アリサという女は如何なる状況であつても稼ぎ時を見誤る人間ではなかったのだから。

それでも俺は信じていた。きっと大丈夫だろうと。何も変わるはずないのだと。今の生活が崩れる事はないだ

ろうと。

しかし、彼女は決定的に変わっていった。理解できないくらいの速度と方向で、変化して行つたのだ。

あれから八ヶ月、彼女は見違える程だった。仕事を手放しては建設関係に手を付け、果てには寧ろ武器を運ぶのに使つていた船などもそこに当てている。

「どういう事だアリサ！」

「別に？」

「別について何だ」

任せていた注文がまともに処理されてもいない。今日までに品を仕入れて運計画が台無しだ。久しぶりの大きな仕事だったのに、上手く行けば15万ドルは軽かったというのに、全て棒に振りやがった。

「受けてた注文は取り消しておいたから良いじゃん」

「良い訳ないだろ！ 船の維持費もただじゃない！ ちんけな木材とか資材売つて稼ぎにもならねえのは知ってるだろ。そんなもん繰り返して何になるつてんだ！」

「さあね。何にでもなるんじゃない？」

「テメエーは！」

俺達は何んでもない運送システムを持つ訳でも、既にある会社から客を奪える程の売りがある訳でもない。普通の事業で競争すれば寧ろ押されるなんて当たり前じゃないか。

「落ち着くまでは俺が全部引き継いでも良いつて言ったよな？ 何でこんな邪魔ばかりするんだ。今まで俺達が築いてきたのを全部ぶち壊す気か？」

受けた仕事を何度も理由なしに破棄するなんて、どんな事業に携わろうと許されないうら。そんなの常識だ。しかしアリサは逆に平然とした無表情に苛立ちを浮か

ばせる。

「うるせえーんだよエリック。あんたが今まで手伝ってくれた事は嬉しく思うし楽しかった。でも、頭に乗るんじゃねえ」

「……」

「別にやりたくなくなったから辞めるだけ。それを止める権利はあんたにない」

少し憤りを感じさせる目が俺を睨んできた。灰色の瞳は今まで見た中でも最も綺麗で透き通っている。

「そんな事よりあんたもこっちの仕事手伝いな。船の維持費もたじやないんだから。こき使わないと」

「ふざけるな！」

頬杖をついたまま興味なさそうなアリサに思わず声をあげてしまった。けれど到底理性だけは納められない感情が喉元まで込みあがっている。俺にはそれを少しづつでも漏れださせる以外に術がない。

「俺達はこの商売に才能がある！俺達が求められているのは建設業でも、アボカド農場での農夫でもない、武器を売るのがディーラーだ！こっちが俺達のやるべき事に決まってるだろう！」

「何熱くなってんだ？今までが良くなかっただけ。これから良くしていこうというだけ。何が問題だ？」

確かに、それはそうだ。褒められるような事してきたわけじゃない。しかし少なくとも誇れる仕事をしてきた。いや、誇れなければいけない真似を平然とやってきたではないか。

「今住んでる別荘はどうやって買ったアリサ？」

「辞める」

「今チーズをつまみに飲んでいるワインはどうした？」

「辞める」

「使っているパソコンは？資材運搬に回した船は？食べた物、着ている物、住んでいる場所も全部武器を売って稼げた物じゃねえか。商品が何処に使われるかを考えない。鉄則を忘れたのか！」

「辞めろって言うてるのが聞こえないのかエリック！」

黙々とパソコンの画面ばかりに目を向けていたアリサがようやく立ち上がった。椅子を倒れさせては俺と同じで激昂した様子でこちらの胸倉を掴みあげる。

「あんたもう黙れ。それ以上言ったら口を鉄線で縫合してやる」

持っていたワイングラスを落した左手からは爪が掌に傷を付けていた。床に広がるワインに別の色の液体がポタポタと落ちる。

「なんなんだ一体。テメエどうしちゃったんだアリサ」

たったの数年、されど八年以上四六時中を一緒にいた。癖も、好みも、ホクロの数も、先に洗う場所も知り尽くしている。にも、今じゃ目の前の彼女が何を考えているか分からない。

まるで別人になってしまったような感覚だ。それも目まぐるしい程急激に。

「怖いんだよ」

「今更何を、俺達紛争地域で散々銃口向けられて、激戦地も通り抜いてきたじゃないか」

「違う。別にそんなのどうでも良い。寧ろ私、火薬の匂いにはちよつと興奮するから」

「まさか良心の呵責とでも？」

「そんなの感じた事も無い。酒少し飲んで終えるだけ。あんたと同じさ。でも」

眉を潜ませては視線を自分のお腹の方に向けた。服の上でも隠せないくらい膨らんだ様子はたった数カ月前と

比較させない変化を体現している。

「この子が、怖い」

子供を殺しかねない銃と銃弾を手渡してきた。

「この子が普通に育って、私達の事を知るのが、怖い」

暖かい街をも焼き尽くす砲弾を流してきた。

「自分も、そんな金で生きてるんだと思われのが、怖い」

平和になれたかも知れない国を壊滅させうる武器を売りさばってきた。

「それでも何不自由なく生きる方が幸せに決まってるだろ。そうだっただろ？お前も俺も」

後悔しないと思っていたのは、生まれ育った場所でも時死ぬかも知れない恐怖に怯えるよりマシだったからだ。疑う事がなくなったのは金と立場を手に入れてからである。

二人分の重さが俺の胸元に寄り添ってきた。一人は誰よりも愛らしく、一人はその存在が誰よりも可愛らしい。

「それでもワインを飲む時に血の味を感じない生活が良かった。少なくともアルコールが喉を潤さなければ見えてきた光景が浮かばない日常が必要なんだ。それをようやく気付けた。エリック、少しでも私に恩を感じるならこの我儘に付き合っ頂戴」

言い返す言葉が思いついた。「世界的な企業が締結している中国の組み立て工場は、未だ疑似奴隷制度を用いている」のだと金の力を力説したい。

「俺達が売っていた武器の9割はUN安全保障理事会の加盟国から生産された物じゃないか」と思い浮かべた。い。

「募金に金を投じる殆どは、金が何処に使われているのかの確認すらしないまま己を善人だと思いたがる連中ば

かりだ」とこの世に貧しい者を利用する我々人間の素晴らしさを覚えていて欲しい。

どこもかしこも金の為に魂ごと他人を売れるような連中しかない世界だ。それを俺達は直接見ては参加してきた。子供への募金額を政府が団体と横取りし、戦争に懐疑的な国が銃器を紛争地域に流す。

「奪われるだけが嫌だったからお前についていった。その時間すら否定されたら、俺には何も残らない。俺には人を殺す武器を売る事以外」

そんな世の中で俺達は必要な存在だ。そんな世の中だから俺達は必要な存在でいられる。他の場所では、俺達はただの薄汚い犯罪者に過ぎない。

だからこそ

「生きていく意味がないんだ。俺は」

「それくらい」

アリサは俺の手を腹の上に持っていた。掌の体温を手の甲で感じ、顔も知らない小さな誰かの動きが彼女の腹から指先に伝わる。

「それくらいこの子が作ってくれるさ。真新しく、輝かしい、新型の奴を」

「随分と、値がいきそうだな」

「やってきた事は忘れて、これからの事だけ考えよう。」

これから私達二人の鉄則は一つだけ。「報いさせない」だ。何と言う我儘だろうか。数々の可能性を踏みにじった癖して、今更我が子大事さに何もかも忘れろと宣言するなど正気の沙汰とは思えない。だが、何て事だ。

(俺もそうありたい)

そう望む自分を否定できない、したくない。身勝手ながら、何て事だろうか。

やってきた事の数々が頭を過っているのにも、目の前

の彼女と子供しか残る物がない。

「潮時、だな」

元々が非公式での仕事故か、驚く速度で色んな物が手放されていった。といっても連絡を切るか変えてしまうかといった物理的な通信の途絶、紛争地域の方々にとっては一番効果的である。

俺と言えば以前の出来事も全部片付いたリビアで酒の瓶を傾かせていた。戦争も終わった場所で俺が何をしているのか。といえば

「寂しくなりますね。本当に辞めるのですか？」

数回顔を合わせただけが、武器商を営む方々を集めて酒を奢っていた。辞めるついでに貿易を続けている方への営業である。

「合方が辞めるといふ事なので。ついていくしかないという感じです」

「任せてください。いなくなる分の穴埋めはしましょう」

「その件は宜しくお願い致します。それで実は木材等をこちらから取り扱いたく思っていますね？ できれば必要な方々へ連絡をとりたく……」

これからの情報交換を兼ねてこちらは先方に武器の輸入源や輸出先を教え、逆に建設業とかに詳しい方に話を聞いた。運が良ければ大手ともコネクションを取れるだろう。ノーハウもとてつもないバックもないなら、こうするしか生き残る方法がない。

「普通の、普通の街だな」

以前来た時は砂漠だったが、普通に車達が走り、普通にビルが立っていて、普通に人々が住んでいた。案外ある程度発展している国であれば都心はこんな物である。

寧ろ良く分からない古い建物の内部を撮ったような写真は、こういう国の方が圧倒的に多い。

「そもそも観光客を集う街でもないからか、コロナの影響は少ないな」

銃弾が何処で飛び交うか分からない地域、寧ろ人間の方が少なかつたのでそもそも気にした事もなかった。けれどこれからは一般向けの商売、気にしなくちゃいけない事も変わっていくだろう。

(そんなの言っている場合でもないか)

アリサへのお土産を買う訳でもないのに街中を歩いているのには理由があった。ホテルから出てからという物、後ろから誰かがついて来ている感覚が拭えない。

それなりに普通の背広格好をしてきたつもりだったが、高そうな時計を付けて来たのが問題だったのだろう。(それとも、いや俺の顔を覚えていたような連中に、たまたま街で発見されるなんてのはありえないか)

「右に4回目か」

右方向だけで4回も角を回ったのに同じ奴がずっと後ろにいる。わざと人通りの多い場所から離れずにいるが、どうも面白い物しにでかけて帰り道を忘れたボケ老人にも思えない。親切な配慮と案内よりは、鉛の弾丸をお見舞いして上げた方が良さだろう。

「いや、何をバカな事を考えている」

以前いた田舎の基地近くなら問題なかった。だがここは街中、一様外国人である俺が誰かを殺せば問答無用で警察に撃たれる可能性だってありうる。即座に銃持ち出して撃たれて派賄賂を提案する時間もない。

「ま、仕方ないな」

俺はスマホを取り出してウーバーのタクシースービスを利用する事にした。どの国も最近も導入している

し、大抵の場合ぼったくる連中もなくて良い。

最初歩き出して場所に戻り、呼んでおいたタクシーに乗り込んだ。直ぐに「トリポリ国際空港」と伝えると車輪が回り始める。後ろからついてきていた奴はビルの角で立ち尽くしたままで、道路の上を走っていると頭の天辺すら見えなくなった。

「最近も、まだ危ないのですねこの国は」

「はは。仕方ありません。一年前まで色々ありましたから」

一息ついてようやく俺はネクタイを少し緩める。

「お客さんはこんな時期に、いえ事業ですか？」

「はい。まあいざれ観光もしたい物です」

そういえばこの国は何度も訪れたのにまともな観光をした事がない。

「リビアンガラスの工芸品は有名ですから。帰り際に一度寄りたいた物です」

「奥さんの為にどうですか？」

「さて、どうでしょうね」

「空港近くに良い店がありますよ？」

自分の知り合いの店にでも連れて行くつもりなのだろうか。

「ん？」

しかしながら結婚指輪もしていないのにどうやって結婚したと知ったのだろう。この近辺だと俺くらいの歳は結婚してない方が可笑しかったりするのだろうか。

そんな事を頭の片隅に、無意識的にスマホを取り出して地図アプリを開いた。予約していた航空便と共に現在位置が表示される。

「何か南に向かってませんか？ 空港は北の方だったよな」

「いえいえ問題ありません。ちゃんと目的地に着きましたから」

「そんな訳」

がない。空港までは車でも20分以上はかかると出ている。と口に出せなかった。窓の外から広がる風景に全意識が奪われてしまったのである。特段美しい自然等ではない。

普通のビル、普通の街並み、普通の車達、普通の人々。しかし見慣れている。

(元いた場所……だ)

瞬間窓の外を覗いていると前の座席から聴き慣れたプラスチックと中の金属部品がぶつかる音が聞こえてきた。

「貴様のせいだ！」という叫びが俺に届く前に銃を抜く。引き金を引けば鉛の弾丸が音速を超えて運転席で銃を向けようとしたタクシードライバーの前頭部に風穴を空ける。状態を最大限後ろにそらしていたが、返り血二滴が手についた。

「こんな街中で、なんて大胆な奇襲なんだこいつは。アサシンにでもなったつもりか？」

先程のストーカー野郎もグルだとすれば合点がいく。

ウーバードライバーとして待機していて誘った訳だ。正直これは自分の落ち度である。

(信用し過ぎた。これからは注意が必要だな)

街中の隅々まで銃声がなり響き、周囲の人々の視線が集った。現在位置からは警察が見えないが、いきなり見つからなくて良かったって所だろう。

「しかし警察もないのかこの街は！ いや何処かにはいるだろ普通！」

賭博になるが一旦逮捕させられれば逆に安全だ。国外追放されれば手だしもできまい。

人が多い場所を求めてカフェとビル並ぶ大通りを歩く。背広を着ている会社員達も多くて助かる。

「や、やったのか？」

呆れた顔で MIGLIA を握っている男が人々の中に混じっていた。当時兵士達から「ハンド・キャノン」とまで呼ばれる名銃をあのような間抜けな奴が握る事になるとは、コルト社も予想出来なかっただろう。

「クソガキが」

俺は正確に奴の呆けた顔の真ん中に銃弾を撃ち込んだ。奴はそのまま崩れ落ちて地面に伏せる。

(胸糞悪い事ありやしない！ 俺の商品を使えっつんだ！)

とにかく警察、若しくはこの辺ウロウロしているかも知れない私服警察に逮捕されるのが唯一の救いだ。流石に分が悪すぎる。こんな銃声を出したのだから気付いて駆けつけてきているだろう。

壁伝いに脚を押さえつけて歩いてみると、人々が避難した大通りで無線機を手を取っている警察二人組が立っていた。その内の一人と目が合う。

「警察！ 巡回中なのか。丁度良いぞ！」

しかし様子が可笑しかった。こちらを指差しては何やら言い争っていると二人組は踵を返しやがる。

「おい！ 今の銃声は俺だ！ テメエー等聞いているのか！」

どうにか片足で追いつこうと歩くも、警察の服を着ていた二人組はあつという間にいなくなった。

「金でも受け取ったか！」

とにかく人々がいる所まで行こう。そう考えてカフエの角を回ると知らないオッサンがナイフを振ってきた。

「死ね！」

最初の振りに地面に尻餅をついてしまう。奴はそのまま全体重を乗せてナイフを振り下ろしてきた。咄嗟に左腕を上げると、まるで紙一枚を鋭い錐で貫く様に、すんなりのアーミーナイフの刃が肌と肉を貫く。

「アアアアア！」

自分の腕にナイフが刺さる場面を目が取り入れ、全身が痛みを取り入れた。銃は撃たれた直後でも気付けなかったが、見える分に痛みが増している。

「だがナイフより銃を変えバカ野郎が！」

俺は手に持っていた Glock を奴の口の中にぶち込んで引き金を引いた。銃弾は脊椎を破壊し、貫通して地面に破片を散らす。

手と脚を引きずって、人々が逃げる方向更に進んだ。

人並みを利用して逆に連中を誤魔化す。俺に文句があるなら、逆に俺以外の奴等を巻き込むテロ行為には及ばないだろう。最悪及んだとしても壁になってくれる。

「俺と同じで武器なしには生きられないような連中が！」

自分の激しい息切れと吐息の中でも、はつきりと耳障りな銃の装填音が聞こえた。元だが仕事柄距離と方角と銃の種類と口径まで分かる。俺は背中を壁に当てて銃を構えた。しかし一瞬引き金が、中から引つかかった様に硬くなって動かない。

「あ、あんなのせいで、あんなのせいで！」

振向いたそこで、小さな赤ん坊を抱えた女性が震える

片手で銃を握っていた。正確に彼女の心臓部を狙って銃を構えられていたのだが、最も大事な時に銃が不具合を起こしてしまう。安全性と強度が保証された Glock にこんな事が起きるとは思わなかった。

そうしている内に発砲音が耳に届き、気付けば俺は壁から滑り落ちて天を仰いでいた。首元から火傷する程の熱さが根付く様に全身に広がる。

「ガハッ！」

口の中から大量の液体が吐き出された。鉄の味と生臭さが広がり、意識が霧に包まれるが如く暗くも朦朧になつていく。

「あんなのせいで！」と怒りだけに身を任せたような、

理性の欠片もない女性の叫びに発砲音が続いた。一発、

二発、三発、と空襲がアスファルトの地面に落ちる。

それはそれは相当下手くそな射撃の腕だった。なんせ結局12発の中で最初を含めて4発しか俺に当たらなかったのだから。人に苦しんで死んでほしかったら、ホロ

ーポイントを改良した RP 弾をお勧めしたい物だ。後レザーポイントを改良した RP 弾をお勧めしたい物だ。後レザ

ーポイントを選択すれば完璧だろう。

（ダメだ何も浮かばねえ）
全身が、ただ只管焼けるようだった。まだ熱い空襲が地面で転がり、その綺麗なフォルムがガラスのように俺の顔を映す。

「……」

一瞬。ほんの一瞬だったが、瞼を閉じながら俺は安心してしまった。銃に不具合が起きて良かったと思つてしまったのである。

「これを活かさなきゃなアリス」

「そんなの言っている場合!？」

いつの間にか、俺もしらない間に俺はアメリカに借りていたマンションにいた。俺の呟きにアリスは眉を潜ませて刺々しい声で怒鳴る。しかし口元には今までと同じ、ほんの少し楽しそうな笑みを含んでいる。

「こんな大事な時期になに銃に撃たれてんだよ。さっさと引越しの手伝いしろ」

彼女の両腕の中には見知らぬ赤ん坊が抱かれていた。顔は上手く見えないが、何故か自分の子供だつて事は直ぐに気付かせてしまう。

「入院している内に私も入院したんだぞ？ ちゃんと親としての役割くらいやって貰わないと困るって！」

「すまん。ちよつと寝てた。直ぐ準備する」

「別に良いけど？ 『すまん』より『ありがとう』ございます」

「あああ、ありがとう」

少し呆けながらもソファから尻を離れた。いつも見てきた彼女がいつそうカッコよくて、思わず少し白髪混じりのブロンドに見とれてしまう。

「実は、俺この8年で初めて言うかも知れないんだが」

「何？ まさか宝くじ!？」

全くがめついな奴だ。そんな都合の良い話がある訳ないではないか。俺達みたいな人間に。

だからこそ言いたくなった。今まで伝えられずに酒と飲みこんでいた言葉を。

「アリス、あんなの事愛してる」

「奇遇だエリック。実は私もなんだ。お前の事愛してる」

TV にはリアで起こった白昼堂々銃撃事件が取り上げられていた。私は書類を作成し終えてようやく肩を少

し解す。

「相変わらず物騒だな。あそこは」

こんな時こそ奴が必要だというのに、仕事を変えると決めた途端アフリカと中東を回って挨拶参りとはよくやる物だ。せめて居場所くらいはちゃんと連絡して欲しい。

「ルーカス、君のお父さんは本当に融通の利かない人間だよこんな時に。でもまあ、これからさ」

ただだけど、名前も決められた。正直ちよつと怖くはあるが、何とかなるだろう。いや、酒は飲んでいないが、何とかなる気がした。あいつと私が居れば今まで通り何とかなる気がする。

「エリック、さつさと帰ってこいよお。一人は寂しいだろうが」